

須玉町埋蔵文化財報告 第五集

西川遺跡

圃場整備事業に伴う山梨県北巨摩郡須玉町穴平

西川遺跡昭和61年度、昭和62年度発掘調査概報

1 9 8 8

須玉町教育委員会

須玉町埋蔵文化財報告 第五集

西川遺跡

圃場整備事業に伴う山梨県北巨摩郡須玉町穴平
西川遺跡昭和61年度、昭和62年度発掘調査概報

1 9 8 8

須玉町教育委員会

序 文

昭和61年度、62年度と県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財調査を行い、名刹遼照寺の周辺を字名で西川と呼ばれるところから、調査対象区域を西川遺跡と名づけました。川又地区北部から順次、圃場整備事業が実施され、それと平行して、川又遺跡（59年）川又南遺跡（60年度）から縄文時代に始まり平安時代に亘る集落が発見され、複合遺跡としての期待を61、62年度の調査に多く抱いておりました。

関係各位の御指導と地元の方々の御協力を待つて、概報報告書に記述されてますような、数々の貴重な資料を得る事が出来ましたことを厚く御礼申し上げます。

昭和63年3月31日

須玉町教育委員会

教育長 板屋 賢昭

例　　言

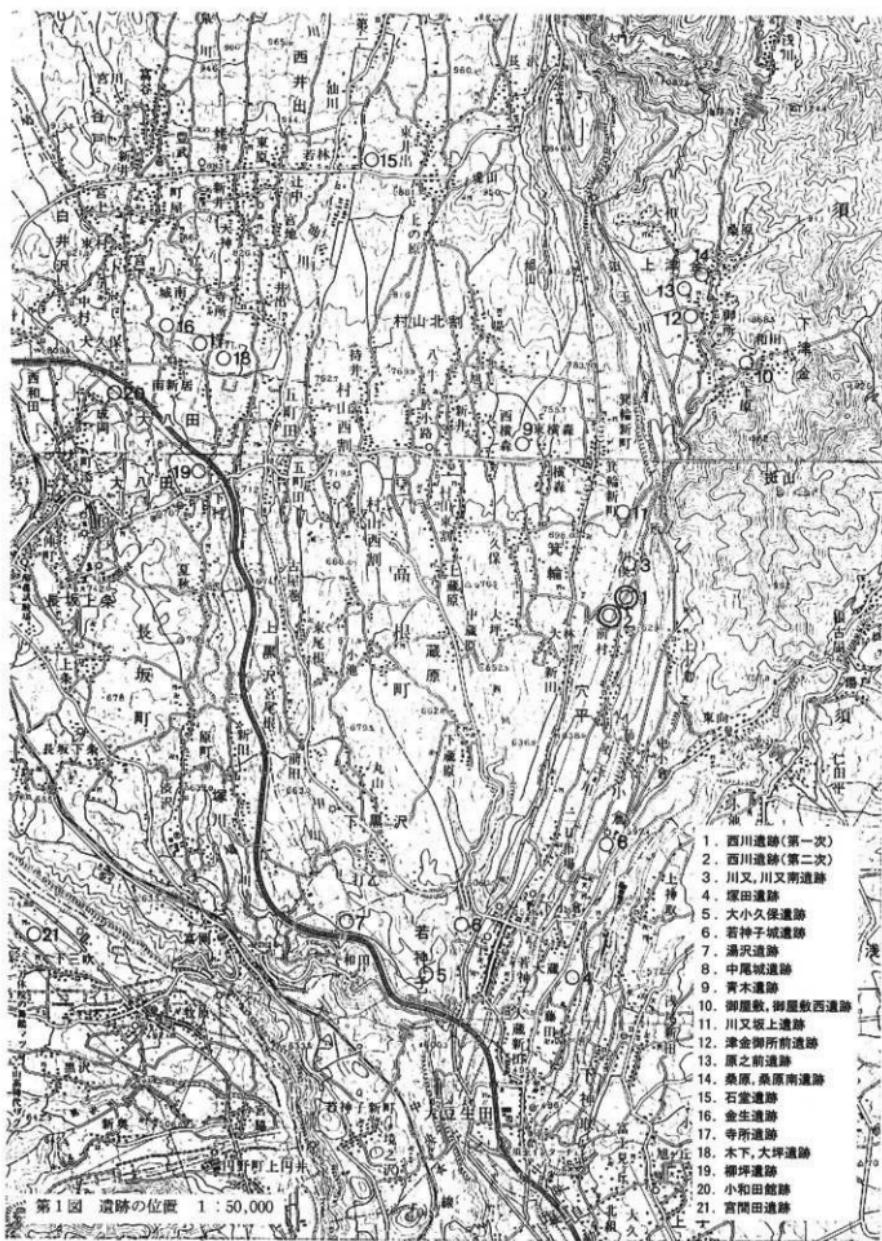
1. 本書は県営圃場整備事業に伴う西川遺跡の発掘調査報告書概報である。
2. 本調査は事業主体者である候北土地改良事務所との負担協定により、国費、県費の補助金を得て、須玉町教育委員会が調査主体となり昭和60年度と61年度に亘り実施した。
3. 本書の作成に際し、図面整理、空中写真撮影等はシン航空写真株式会社が行い、遺構、遺物の写真撮影は、山路恭之助、津金義尚、山田浩山が行った。執筆は深沢裕三が行い、編集は山路恭之助が行った。
4. 本遺跡の出土遺物、諸記録は須玉町教育委員会が保管している。
5. 発掘調査組織

調査主体　須玉町教育委員会 教育長 板屋 賢昭

調査担当者　　主任 山路 恭之助

調査員　　深沢 裕三

補助調査員　　津金 義尚(61年度)



はじめに

遠照寺が建てられた約700年前後の時代をふりかえってみましょう。水仁二年（1294）に述べたと寺記に書かれていますが、これより12年前（1282）の弘安四年に東京都大田区池上にある本門寺で日進が61才で亡くなり、その前年には元（昔の中国の呼び名）と高麗（朝鮮半島の一つの国）の聯合軍が、文久年間に九州の博多に襲来してから二度目の攻撃をしかけてきました。前は元軍は2万でしたが、弘安の役にはそれよりも5倍の兵力でした。この時も又、大風のために、8割の兵を失い、逃走しました。文安、弘安の役を指揮した北条時宗という将軍も1284年弘安六年に34才の若さで亡っています。

遠照寺は水仁二年に坂本八郎祐の三代目伊賀守定照といいう人が自分の屋敷に寺を建て、こゝに日進上人のお弟子の日弁といいう人を呼んで開山したといわれます。日進上人が義夫里（身延）の渡木井六郎良房に招かれ、「今ノ西谷ト云フ處ニ庵室ヲ造り住マシム…」これが久遠寺のはじまり…と『中華國史』という本に書かれているのと似ていますね。

遠照寺と穴平村

穴平は川又、前村、中村と二日市場の四つの集落が一つの村となっていましたが、川又を除いて、遠照寺の門前の村が前村、寺と市の中間にある村が中村、二日間の門前市を開いた二日市場。若神子村誌の中の旧穴平村絵図には二日市場の西に安立坊という建物の絵が記されています。慶応四年に39代目の玄寿院といいう遠照寺の和尚さんが甲府守寺御役所に届け出た「今般御改巨細書」の塔中（塔頭が正しい）の中に安立坊、三間半×五間が載っています。塔頭は大きな守のわき寺で、遠照寺には安立坊の他、日朝庵、妙見庵、妙蓮坊、澄順坊、寛光坊の六僧房がありましたが、妙蓮、澄順、寛光の三坊は大風で潰れて再建出来ないでいると書かれています。日朝庵が現在、前村バス停脇に建つ日朝サンあたりにあったと思われます。貞享二年（1685）中華國史見筋穴平村御検地水帳に村を小さく分けて名付けた字名の中に妙蓮坊が見えます。万年橋（安津那橋）付近を妙蓮坊跡と呼びました。川又の北部を指すのかも知れません。この時には何かの原因で建物ではなく、田か畠になっていたかも知れませんが、塔頭に関係があると思います。

六文銭と石臼

六つの塔頭がどこにあったか証明するてだてはありませんが、昭和61年と62年の二回にわたって行われた発掘調査で、大変興味深いいくつかのことがわかりましたが、その中から一、二あげてみましょう。

前村バス停から西へ、片瀬を登って高根町へ出る村道の片瀬寄りの北側一帯の調査で、たくさんの大小の土塁（円形の穴）から中国の古い時代に造ったお金が、61年は20枚余り、62年には124枚発見されました。特に62年では、20m×20mの範囲からが特に多く、骨や骨粉、釘、キセルの吸口部や小さな砾石も出てきました。仏教では、人が死ぬと三途の川を渡る時六文のお金をはらわないと川を渡って冥土へは行けないと教えました。ですから人が死ぬと六文銭に代る紙で作ったお金を、その人のひつぎに入れてやる習わしが今に残っているわけです。凡ての土塁から六文が出てきたわけではありません。一枚か二枚しか出土しない場合の方が多いのですが、鏽びた土に雨や風にあたり、さらされてボロボロになったり、粉々になってしまった古銭が、もっとたくさん埋められていましたかも知れません。

遠照寺から南西へ200mばかり離れたところから2間×2間（3.7m×3.7m）の正方形の範囲に7ヶの土台石が整然とえられた建物跡が発見されました。慶応四年の扁山書に出てくる鬼子母神堂が式間四方で、建物の大さきはびつたりです。おそらく、六文銭の出た上鉢の北側か、その付近に脇守があつて、その寺の墓地がこの附近にあったと思われます。

遠照寺で行われた大きな行事に、近郷はもちろんのこと、遠くから参詣にこられた善男善女を、脇寺にお泊めしたことでしょう。歓談するこれらの人々に寺側では、くるみを挽き、青菜に和えて食卓に提供したかも知れません。果実を搾り、穀物を挽いた石臼が幾つも発見された。

62年度に調査した地域からは、以上のように六文鏡で特徴づけられますが、生活用具として当時欠かせぬ石臼、籠や、刃物を研ぐために大切な砥石、次にのべます火打金等が発見されました。ところが地面を堀り下げてカマドをつくり、柱を立てて住んだ、堅穴式住居址は見つかっていませんが、平安時代の食器に使われた杯やカヌメのかけらが発見されています。平安時代から江戸時代、そして現代まで、びっくりする程長い間、入れかわり、たちかわって、この付近をある時は住居に、ある時は墓に、またあるときは寺と墓に、やがて荒れた原っぱになつて、再び耕されて今に変った、ムラの移り変りを、これらの遺物から学びとることができます。

初めて出土した火打金

日本古来の発火法として、火花式発火法があります。これに使用する道具は、火打金、火打石、点火具としての火口、つけ木からなります。西川遺跡からも、北宋銭、南宋銭、朝鮮銭などが出土した土塹付近から完型の火打金が発見されました。他にも火打金と思われる鉄片が3、4ヶ出土してますが、鋒が厚く折損していたりで確定は出来ません。半分折損したものの一つは、刃部の弯曲が緩く長く使用されたようで、両端に突出部が目立ちます。

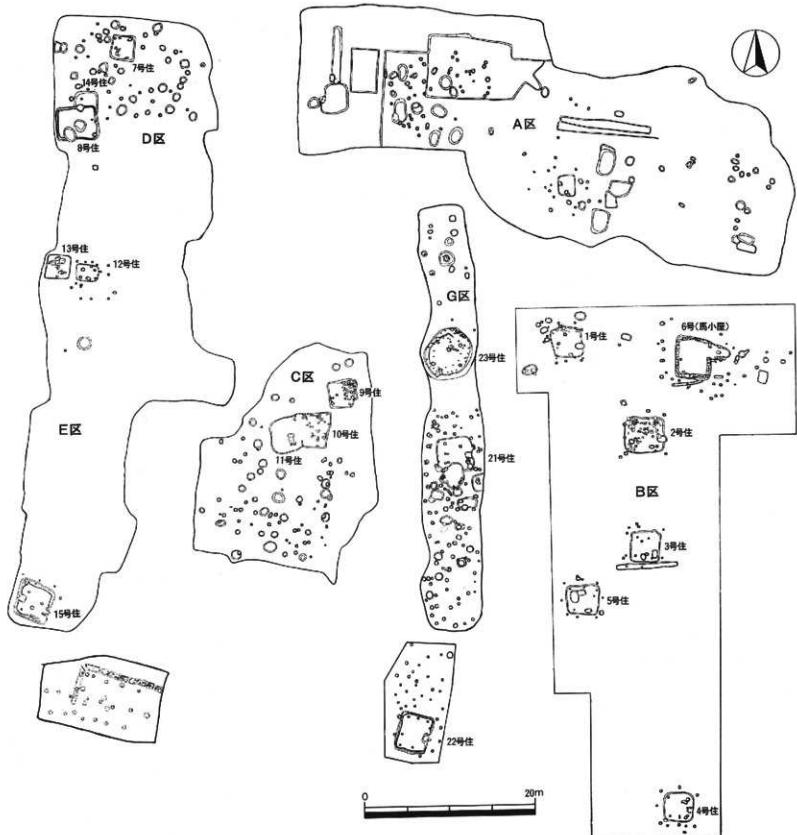
それでは何時頃から火花式発火法が用いられたのでしょうか。6世紀末から7世紀初めとされる岡山県落合町^{トヨタ}坂一号墳から1点出土していて、古墳時代から、奈良時代が少なく、平安時代が比較的多く、近年は中世の出土例が目立ちます。

次に形ですが、山の形をした「山型」（笠の形にも似ているので笠型ともよびます。）と“コ”の字形鉄片を木片に打ちつけて使用する「カスガイ型」、長方型の鉄片の「短冊型」、その他に「台形」型鉄板が火打金として使われました。「山型」には通称「ねじり鎌」とよばれる火打金は江戸時代の武士などが愛好したといわれます。両端の腕をのばして一つにまとめたもので、腕にねじりが入っているところから名付けられたようです。

カスガイ型、短冊型は江戸時代に出現します。西川遺跡から出土したのと同様の山型火打金は、平安時代から室町時代に使われたようです。青森県碇ヶ関の古館遺跡（平安時代末期11～12世紀）から出土した2cmほどのメノウの火打石は小石ほどの大きさです。中世城郭の青森市尻八郎遺跡からも石英製の小さな火打石とみられるものが出土しています。このように小さな火打石では、西川遺跡でも出土した小型の火打金に打ちつけることは無理であって、こすりつけたり、摩擦する方法で発火したようです。ですから、持ち歩くに便利なように小型化されていたのでしょう。



第2図 発掘区域と工事計画図



第3図 第一次遺構配置図

昭和61年度 西川遺跡

第一次調査概報

I. 調査の実施と経過

西川遺跡は県営圃場整備事業に伴い昭和60年12月に調査終了した川又南遺跡の南、穴平工区内西川に占地する。本調査は、町費 1万円のほか、須玉町山梨県北土地改良事務所と締結した「埋蔵文化財発掘調査費に関する協定書」に基づく負担金 700万円と、文化財保存事業として国費 200万円、県費 100万円の補助金を受けて、昭和61年7月14日より同年9月29日まで実施され、秋施工分として同年11月4日に始まり、12月26日に調査が終了した。

発掘方法は、重機によって表土剥ぎを行い発掘調査順にA区からG区まで7区をつくり、各区は $5m \times 5m$ 単位のグリッドを組み、遺構の有無と上層の堆積状況を確認しながら調査を進めた。

II. 遺跡の立地と歴史的環境

八ヶ岳南麓末端の「片瀬」と呼ばれる台地が北は高根町箕輪新町の東端から南西に小手指坂あたりまで伸び、穴平地区からの北高は40~50mが測られ急崖が続く。須玉川によって侵食されて形成された河岸段丘上に、北は「銀鬼の喉」と呼称された万年橋付近から県道若神子~津金線ぞいに川又、前村、中村、二日市場と続く集落は、古くは平安時代の屯倉の推定地とされる大蔵、小倉の対岸にあって主として穀物を育成収穫して暮の營みが続けられて来た。

鎌倉時代後半に日蓮の弟子越後阿闍梨日弁を請し開山した定栄山遼照寺が前村の北、西川にあり、戦国時代、天正元年津金美濃守の嫡子修理亮が姥正林尼の為に建立したと云われる東向山見明寺が二日市場に近い片瀬にある。若神子村誌の絵図には、穴平区中村に見明寺の隣寮の無量軒、二日市場には遼照寺の扣僧庵立坊が見えるが今は無い。

昭和59年から始められた川又地区の圃場整備事業以前の踏査段階で、これらの寺社の周辺から土師質土器片、中世から近世に至る陶磁器片多数を拾集し、穴平地区が広範囲に亘って埋蔵文化財包蔵地であることを認識した。果して59年、60年川又、川又南遺跡の発見から、縄文時代前期(約7000年)から中期、後期、晚期、弥生時代の前期、平安時代から中世までの遺構遺物が検出されている。

III. 遺跡の概容

A区の概容 (第2・3図)

河川の氾濫による大小の礫や丸い河原石が堆積し、比較的薄い黒褐色土の覆土内から土師質土器片や陶磁器片が出土した。A区西部からは平安時代の水田跡と思われる土層が発見された。遺構は性格不明の方形堅穴遺構が4、重複している方形堅穴遺構が1検出されたがそれらの大きさは約 $2m \sim 3m$ の1辺を有する方形のものと不揃いで、殆どが10cm~15cmと浅い。遺構内は礫が多く柱穴は見当らない。他に土塙5と規則性に乏しく浅いピットが検出されている。

B区の概容 (第2・3図)

B区は調査区域中最も広い区域で県道清里~須玉線沿いは巨大な岩や大きな河原石が耕作土のすぐ下から現われ、更に小砂利、砂と続き、覆土は浅い。從って遺構、遺物は殆ど検出されなかった。然し調査範囲が県道沿いの南北に伸びる砂礫が多い区域から東へすゝむに従い、A区とも異なり比較的に礫や河原石が少なく、東西40m

×南北65mの範囲から東壁にカマドを持つ平安時代の方形窓穴式住居址が5軒検出された。3号住居址は北壁にカマドを構えていた。出土遺物は、1号住居址から甲斐型の完型に近い壺の他薄手のカメ片、石鎧1ヶが、2号住居からは体部に墨書が認められる壺が2ヶ（古と他は判読不可能）の他に甲斐型と異って素地壺が荒く成形に粗悪な壺が3ヶ、両者の破片が出土している。4号作からは丸底の完型壺1、5号住から甲斐型壺片などが検出された。2号住居址の北東から検出された6号遺構は、須玉町では初見の特殊遺構であった。プランは方形で、深さ80cm位まで大小の河原石が投入され、方形の周囲の壁は人為的に石を積みあげられていた。北東隅が人口部と思われ、遺構内へ傾斜したスロープを備えている。遺構の周囲から直径20cmの柱穴が検出された。

出土遺物は、覆土中から打製石斧1、投げ込まれた石の除去中に绳文時代後期に比定される上器片が検出されたが、遺構の半ばから明黄褐色の土師質土器の口縁部や糸切り痕のある土師器の底部等が出土し、深さ85cm程の床面付近からは煤が付着した灯明皿口縁部、赤味を帯びた土師器の口縁部、縄手の土師質壺口縁部、淡黄褐色の土師質土器の底部が検出された。北壁の東寄りから三枚組の古鏡（明鏡洪武通宝1368～1398、北宋錢天聖元年（1023）各1枚と不明のもの1枚が出土している。中世の馬小屋と推察される。

C区の概容（第2・3図）

C区は速照寺本堂の東側一枚の田で、緩かに南傾しD区に接する。B区に比較して大小種が多く稍湿性気味の褐色土に黒褐色土の埋土の重複窓穴式住居址10、11号と北東に隣接する9号住居址が検出された。遺構は各々浅く耕作による削平によるとと思われる攪乱によってカマドやピット等の附属施設や焼土等の敷布を確認できなかった。9、11号作からの出土遺物は見当らず、わずかに10号住居址から土師質土器口縁部、体部片等が検出された。

G 105-W20から西へ20m、南へ10mの範囲から多数の土壠とピットが検出され、G 105-W25で土壠確認面に埋った石の下から二枚の古鏡（北宋錢、太平通宝976と南宋錢、皇宋元宝1253～8）が出土し、G 105-W12から北宋錢、元祐通宝1086が出土している。（数字は鉛造年）

D区、E区の概容（第2・3図）

C区の南傾する緩勾配地はD区、E区へ伸び、礎は比較的に少なくE区から検出された15号住居址付近までは、サラサラした、利目の細かい黄褐色土で、E区のG 190-W40～G 200-W40あたりは湿気を多く含む黒色土が厚く堆積し、常に水が湧き出て調査し難かった。この黒色土に黒褐色土の埋土を有する方形プランの平安時代窓穴式住居址15号住が検出され、D区からは7、12、13号住居址と8号、14号の重複住居址の平安時代住居址5軒と性格不明の窓穴遺構2基が検出された。出土遺物は7号住居址から内耳十器の体部片と底部片の2片だけで、8号住居址からは完型に近い壺と放射状暗文のある壺、指圧痕のある丸底の壺以外は内黒土器の口縁部片、土師質土器体部片、口縁部、底部等の破片の他、カマドから薄手で刷目文様のカメ片が検出された。12号住居址からも内黒土器片が検出されたが、13号住居址と共に4、5点の口縁、体部面であった。12号住から鉄滓2、13号住では鐵土中から鉄鎧1が出土している。8号住に切られている14号住からは出土遺物ではなく、E区の15号住からは指圧痕を口縁部、体部にのこし丸底の壺と、底部の殆どを欠いた、丸底で指圧痕の壺の他、カマド付近から内黒杯の一部、カメ片が合計14～15点出土している。

F区、G区の概容（第2・3図）

中村地区から前村を経て川又地区へ通ずる村道を挟んでA区の西に20号住居址が検出されたF区が所在する。F区からG区に至る一帯は河川の泥濘によると見られる大小礎や巨石が堆積し、20号住が検出された約400mが平坦地で、この地域から水枯れた河が大きく蛇行して南へ流下するように礎、巨石が露出、堆積してF区へ続く。東壁に崩落したカマドを持つ平安時代の隅丸方形窓穴式住居址の20号住居址から、50点弱の土師質土器片と須恵器片、灰釉陶器片が出土した。

次いで21、22、23号住居址が発見されたG区はA区とF区を南北へ縱断する村道の西側で帶状に細長い調査区であるが、村道から西へ15mから20mの範囲は砂状に近いサラサラした黄褐色土の地山で礎は極めて少なく、巨

石も散在する程である。23号住以外は容易に住居址のプランを検出出来る。21、22号住居址は、共に東壁にカマドを持つ平安時代の堅穴式住居址であった。21号住居址は約4.2m方形、22号住居址は約4m方形のプランを持つ。出土遺物は、21号住居址から90点近い土師質土器及び土器片がカマド周辺を中心に出土し、須恵器、石器も併出している。22号住居址では50点弱の土師質土器片と須恵器片、石器、鐵滓が出土している。21、22号住居址からも、廣の荒く外周をヘラ削り仕上げした底部が丸底の坏が一部消失したもの、劣を残すものなどが出土している。21号住居址では吉味がかった灰色で糸切り痕を残す、極めて野暮たい焼成の須恵器の胸、底部や、底部に木葉痕を残す壺か甕の底部が4点出土している。21号住居址から南西へ17、18m離れた位置に2.5m方形の堅穴造構が検出されたがカマド、柱穴等の住居に伴う付属設備は検出されなかったが、土師質土器片等の出土から平安時代の造構と思われるが決断出来ない。21号住居址から北へ5m、南へ60mと西へ15mから20mの帶状平岡地から多数の土塙と柱穴が検出された。加えて焼土造構が6基検出された。焼土造構の性格は判らないが、円形のプランの核は白色に近い灰色を鮮紅色の円が囲い、更に淡紅色の円がそれを囲う三重の焼土造構で、底部近から土師質土器片が出土している。

21号住居址が発見された北側は田の造成地に伴う地塊で、石積みの北側はやゝ湿気を含み粘性のある黒褐色土が厚く覆われ、23号住居址が発見されたグリットを含む南北10m、東西7mから陶磁器、土師質土器片に併せて縄文時代土器片が出土したことから、調査当初は河川の泥濁などによる土砂の流水によって運ばれて来たものと考察していたが、この区域の北部から焼土造構、土塙等が検出され、黄褐土の地山が南緩していることが判った事から厚く堆積した黒褐色土層を調査し、下げて行くほどに、黒色の土塙をもつ約4mの円形プランの23号住居址を発見した。

造構は東壁から南壁にかけて小ピットを等間隔に穿たれた突出部を設え、中央部に胴部下半がない深鉢の埋煙炉があり、北壁直下に安山岩の石棒が半分横臥し、その左右に平扁な河原石を置き、床との間に低い段状になる点から祭壇を設けられていたように見える。遺物は、住居内全体から出土し、復元可能な深鉢の一括土器をはじめ約300点に及ぶ。特に埋煙炉を中心、西壁寄りと住居内の南西部に深鉢や浅鉢が積み重なるような形で発見され、これらは縄文時代中期（藤内期）に比定されるものであった。石器は石匙、磨石、敲石、圓石、チャートでつくった無径石鎌が出土した。G区北部の地境の石積みを除去した際先端の片刃を欠いた葦岩製か凹縁岩の乳棒状削製石斧1が発見され、23号住居址内からは、撲型打製石斧2、短冊型石斧5、折損した石斧先端部2、大型石匙2、小型石匙2、錐状内寄刃石器1、長細いナイフ型石器、半月形石包丁1など農耕、労働用具としての石器類が出土した。

G区西の一隅に通称イエンさんと呼ばれる前村部落の田の神を祀った約7～8mの区割を除いた約20m²の調査区は往時の西川の本流を埋め田、畠を造成した一部に当るため、大小の礫、瓦岩が多く、これらを除去し、暗褐色土の覆土上を精査する内に埋土が黒色の円形のプランをもつ大小の土塙、柱穴多数を検出した。住居址の造構はなかったがL型溝状造構1が検出された。

出土遺物は、L状造構の内側、即ちイエンさんから南の区城一帯から出土している。完型の遺物はなく、口縁、胸、底の各部の破片ばかりである。内、外面が研磨され、横縞文に区切り縦縞文とお玉杓子文があるもの、口縁に二条の横縞を施したものの、内、外面研磨した鉢型の底部と網代底のある底部片など縄文時代後期（加利B）の遺物が大半を占めるが、縄文を地文に陰帯で脩円の区画をもうけ、その内側に連続爪形文を配した中期初頭の口縁に近い破片2と平安時代の羽釜のツバ1片が出土している。

古銭は、北宋銭が主で他に元と明銭が発見され、腐蝕し判読不可能なものも含め総数26枚を数える。表上削ぎ後の精査で出土したものは少なく、柱穴或は土括内から一枚か複数で出土した。

（詳細別表）猪、篆字のもの5枚である。

IV. ま と め

昭和61年度の圃場整備事業対象外となった名刹日蓮宗定栄山遼照寺敷地を中心に約11000m²を含め西川遺跡全域が縄文時代から平安時代、そして中世の複合住居址である確証を得た。昭和60年度発掘調査した西川遺跡の北、川又南遺跡の往古の生活面である、サラサラした黄褐色土が西川遺跡東部B区～E区の地山であり、G区に於ても村道沿いに南北の帯状に同上層が認められる。この黄褐色土を掘って竪穴式住居を構築している。G区23号住居址のように、黒褐色土の覆土が厚く堆積し、地山の黄褐色土を逐ひ乍ら覆土を除去する間に住居址のプランを発見できたが、河川の泥漿に伴う流水によって堆積した厚い被覆土の下に23号住居址のような住居址がまだ調査区内や調査区外に眠っているものと推察される。

6号石積遺構と23号住居址以外の14軒の平安時代住居内から出土し坏を山梨編年によって推測してみると、9世紀第四半世紀から10世紀第1四半世紀に位置づけられる。住居址外の土壇、特にB区C区のそれは明鏡と北宋鏡が併せて出土している点、陶磁器、釘等が併せて出土した点等から中世の土壇と思われる。G区の西からは住居址は発見出来なかったが、殆どが縄文時代後期に比定される土器片が出土している点からG区西を含め地段丘上での集落の形態がより鮮明に立証出来ることを期待している。



第4図 第二次遺構配図図

昭和62年度 西川遺跡

第二回調査概報

I. 調査の実施

県道清里、須玉線の穴平地区前村バス停、通称日朝サンから西へ180mほどで、川又と中村の集落を南北に結ぶ村道にぶつかる。こゝから更に西へ150m、北へ約120mの区域と南側約70m×60mの面積整備対象区域の本調査は5月21日関係者の鉛入れによって開始された。

調査区のはば中央を南北に走る堰沿いの農道の東側をA区からD区の4区に大別し、発掘協力者の坂本武雄氏宅の北西部に基点を定め5mグリッドを組み、農道の西側は東側のグリッドを延長して組んだ。映北土地改良事務所が細分化した工区内のナンバーを併用し、遺構遺物の位置、収集に利用した。調査区全域を北から南へ重機により遺構確認面まで耕し、その後、人力により遺構の平面プランを確認し、遺構に伴う遺物は、任意の位置にレベルポイントを設定し、位置、レベルを記録しながら収集し、その他土壇、柱穴内と外から出土した遺物は各グリッド毎に記録収集、必要に応じ写真撮影しながら進めた。各区域の遺構及び全体図は、シン航空写真株式会社の協力に依って空撮後巡回記録した。

II. 遺跡の概容

A区(89-1) 概容 (第2・4図)

八ヶ岳広域農地農道整備事業に伴う遺跡詳細分布調査地がA区と北側全体が接し、先行する県埋蔵文化財センターが組んだ2m方形のグリッドを活用して調査を進めた。

住居遺構は検出されなかつたが、巾3.3m全長26m余の東西に敷き詰められた石組遺構が発見された。石組遺構の特徴は両側に比較的扁平な河原石を2ヶから3ヶ組み重ね、中間は丸い礫が積み重ねられている。遺構の東は旧河川(小川)で切られ、西は「家神サン」(若神子村誌旧穴平村絵図の「神明」にあたる。)へ通ずる参道の構築時に消滅している。確認面から地山の明黄褐色土まで50cmあり、任意の巾で残したベルトによって、判つたことは積み重ねた石の間にはコブシ大の礫が詰められ、床面に近い段、埋土は細かい赤褐色土で地山は明黄褐色土であった。遺物は南北に設定したトレーンチの覆土中から、土師質片、陶磁器片が出土している。石組遺構から火輪2、水輪2、地輪1が敷き詰められた河原石の間から出土した。

B区(90)の概容 (第2・4図)

表土剥ぎ後の精査の段階から土師質土器片、陶磁器片、鐵器片等が多く採集され、方形、長方形、円形のプランをもつ遺構が約20m×40mの狭い区域全体から掘立柱建物址と思われる柱穴等と共に検出された。

北壁に3個の巨石を立てかけるように並べ残る三方の壁も大石又は3段に河原石を積んだ方形の右組遺構がG25-W10から検出され、C30-W5からも小振りの石組遺構が一基検出された。二つの遺構の中間の円形プランをもつ土壇から古錢四枚が出土し10cm~15cm下から更に二枚(六文銭)が出土した。

土壇内及び土壇周辺から出土、検出された遺物は量豊富、キセルの雁首、釘、刀子、六文銭など墓に關係ある遺物が殆どで、B区が遊照寺に最も近い点などから何らかの關聯を窺うことができる。又、明黄褐色のブロック塊まじりの土層が重複する土壇の中央部から検出され、堆積状況から地下式土壇の天井部が崩落したものと考察された。

C区とC区西の概容 (第2・4図)

C区(91)のG5-W20からW15の一部に亘り約4.2m四方が著しく焼成を受けており焼土は中央部8cm南程

厚く13cmを測り、当初は焼失住居址と思われた。遺構には平均40cm×50cm厚さ20cm前後の偏平な石又は丸味の緩い楕円形の石が2間×2間(3.7m×3.7m)に7ヶが計測された。南西コーナーの1ヶが欠けし合計8個で、礎石遺構の西脇には、建物に入るために用いられたと思われる同型の平石が認められた。遺物は燈明皿、土師質土器口縁部破片、胴部片、高台付陶磁片、瑠璃片等が出土した。礎石遺構のやゝ中央部から建物に開辟する部分、例えば柱などに塗られ、剥落した朱が検出された。朱の検出から方形の堂宇が建立していた事が推測される。床の焼土は建物の床を版築状に固める目的で運び堆積させたと考察する。礎石遺構を境に南に東西の溝が走り、小ピットが並列し、約30cmの段差の平坦地から3つの方形遺構が検出された。約3m×5mの方形遺構が3m方形遺構とそれよりも稍こ小振りの遺構を切っていた。

遺構のまわりから、これに開辟があると思われる柱穴が認められた。

遺物は前述の他に完型に近い内耳土器がG0-W20から出土し、それから2.3m北、地境下に割れて四散する内耳土器の多くが出土した。

C区西は南北に流れる幅1m程の堀によってC区と区別して呼称したがグリットはC区より続けて設定した。

遺構は大小4ヶ所の焼土遺構と、六文銭を伴出した土壙の他、数基の上塙が確認された。遺物は、G5-W30で完形の杯一個、G0-W35の東の確認面から古錢一枚と刀子が出土、更に2枚古銭がその下から出土している。C区西で南北に設けられた暗渠の東側、G0-27から西川遺跡でしか出土を見ない特殊な凹石と、これと併用したと思われる小さな石棒2が並ぶような状態で発見されている。大小の差こそあれ、この凹石は繩文時代の凹石と異なり、その凹部は鋭角に削るように使用されたものがあり、その大半は石の径に比べ、凹部は小さく浅い。61年度発掘調査した平安時代の20号竪穴式住居址の床直からは25cm×22cmの円に近い楕円で厚さ18cm、凹部16cm×15cm、深さ約10cmの舟底形をしたのが一ヶ出土したが、第二次では土壙の覆土中や、確認面と同レベルで出土している。

D区(92)の概容(第2・4図)

円形、楕円形、方形、長方形の土壙を含む竪穴遺構が50数基が柱穴と共に検出された。数個所の焼土遺構と平安時代の竪穴式住居址一軒がD区西隅から発見された。

D区の東部中央から北西に石列遺構があり、1個か2個の石を積み重ねて並べ、溝は巾約20cm、深さは10cmから15cm掘られ、前後に積まれ又は並べられた石列には比較的平らな石を蓋状に覆っている。石列は土壙群が発見されたレベルより高い位置に構築され、D区の北側と南側を区画するかのように見える。石列の始まりと終りの部分には溝間の流水をせき止める格好に溝へ直角に比較的大き目の石がおかされている。

東壁に90cm×1mの範囲にカマドをもつ1号住居址は4.5m×3.8mの隅丸方形を呈し、東壁を除いて他の壁下には周溝が認められた。

壁は北、東壁が10cm~12cmを測り、西、南壁は7cm~4.5cmと低い。

東壁は土壙を掘った際に削平されている。同時にカマドも消失した様様である。抜きとられた袖石跡から右袖15×45、左袖15×30の凹みが認められた。又柱石の痕も検出された。

カマド前の床直に10×15cm厚さ4cmの平石が出土し、住居内南西の床直からも35×20cmの上部が平坦な石が出土している。柱穴は住居内から4ヶ所と住居の周囲から4ヶ所検出されている。カマドの南東前に検出された土壙はプランが舟底形で、径110cm深さ15cmが測られたが、住居に伴うものか判らない。住居内から出土した遺物は、カマド周辺に集中し、上師質坏底部片、坏片、土師質カメ片と須恵器長頸か短頸壺の口縁部等である。南壁際からもカメ片が出土した。直立した柱状炭化物が東壁と南壁のコーナーから検出された。1号住居址周辺から検出された土壙は、直径が1.2m~1.5mで深さは30cm~50cmと浅く、凡ての土壙が舟底形の床直で壁は袋状(巾着型)を呈しており、B区(90)の土壙と同型であり、出土遺物からも同時期に掘られたものと考察される。

86、87、88区の概容（第2・4図）

C区西を境に86、87、88は南へ緩傾斜面を呈し、中央を幅広い（約3～4m）帯状の水道が南下し、これを覆う黒褐色土が自然堆積し、こゝに土塙、柱穴等の遺構が認められた。大小の礫の間隔を縫うように掘られた土塙、柱穴から古錢、鉄片、陶磁器片、骨片等が伴出されている。堅穴式住居址は見当らなかったが、方形のプランで柱穴やカマドを伴わない堅穴遺構が数ヶ所認められている。G25-W50から厚く銷てしまった山型で小形の完型火打金が出土した。4ミリ位の孔が認められるが銷でふさがっている。86区の複合土塙の上層部から骨片、耳かき状に先端が曲った真輪製の金具、古錢が出土した。（G30-W40）

G40-W45の一帯は二層からなり、一層は粘性の強い褐色がかかった褐色土が15cm、二層は湿っぽい黒色土30cmで、二層の上部からチャート製、全長5cm、最大巾1.6cm、厚さ1.8cmの無径石錠が出土した。着装のための孔が基部に近いところに穿かれている。中部地方に多く出土する弥生時代の石錠である。他に土師質土器片、底部片とチャートの小型磨製石斧が発見された。

87区 G65-W45内の2つのピット内から12枚の古錢が出土している。Aの柱穴の径は36cm深さ20cm、柱穴Bの径22cm深さ40cmと深い。Aから8枚、Bから4枚が次々に出土した。G65-W50に方形の堅穴遺構1、G75-W55から小形の方形堅穴遺構1が検出された。遺物は、70-W45から銷びた鉄片1が出土したが形状から小型の火打金と思われる。土師質土器片、陶器片の出土は少ない。二つの堅穴遺構の中間地点で焼土が堆積した中に埋った状態で石臼1が発見された。

88区 住居址は検出されなかった。87区、88区に2.5mグリットを組み各グリット毎に掘り下げて調査を進めた。東部と南西部から重複した土塙、單一の土塙が検出されたが、深いもの、浅いもの様々で土塙内からの遺物は殆ど出土しない。柱穴と思われるピットも大小様々で掘立柱建物址として把握するには猶日時を要する。遺物は土師質土器片、陶磁器片と、地墳の石積の中から石臼が出土した。G95-W55で閃緑岩製の磨製石斧（全長12cm）が温氣の多い黒褐色土層内から出土した。

107、108区 88区100-W25の杭を南へ延長し、村道を横切って107区、108区に5mグリットを組む。調査範囲は、南北でG115から175、東西がW-25から65までの約2200m²である。

107区の西半分に86区中央を南下する水みちが流れ込んでいて、表土の耕作土を剥ぐと、水分が多く含んだ黒色土層が厚い。その下は大小礫が堆積、水が湧く。107区108区に沿って南下するセギに沿った20×50mの範囲は明黄褐色土の地山が続く。礫は少ないが若干の砂礫がセギ際で認められた。

遺構はなくG110-W20から精査中に、完型の燈明皿1が出土し、G175-W30からも耕作土直下から欠けた燈明皿1が出土している。他には土師質土器片、陶磁器片が若干検出された。

III. まとめ

62年度発掘調査した西川遺跡は須玉川右岸の河岸段丘上に立地し、遺跡の範囲は東西約100m南北約140mに及ぶ。調査地域中央を南北に流下する堰を中心、東側の平坦地に住居址、礫石遺構、方形遺構、溝遺構、石積遺構等、平安時代から中世にかけての遺構が比定される土師質甕、カメ、陶磁器片を伴出しながら発見された。堰を挟んだ西の南北に広がる調査区は一変して、遺構は單一か重複する大小の土塙と、間隔を縫うように掘立柱建物に付随する柱穴らしい小ピットが穿かれている。検出された遺物は北部から中央にかけ、人骨、骨粉、六文銭、釘と燈明皿等が他の区域に較べて著しく多出した。加えて縄文時代の四石に類似した大小の安山岩製の丸石が出土し、火打金は中央から南にかけて検出されている。

これらの遺構遺物の検出から、須玉川に沿って点在する集落に近い緩傾斜ながらも平坦な区域から前述の遺構が検出されたのに対し、旧河川（西川）に近い区域は粘性と温氣の多い黒色土で覆われていたり、大小の礫と砂礫が堆積し、居住するには決して適しい区域とは思えない。出土する遺物から、遼照寺に関する施設（塔頭）とそ

れに付属する墓地が所在していたのではないだろうか。

昭和61年度西川遺跡出土古銭鑄造年代順一覧表

第1表

銭名	枚数	時代	鉄造年代	書体	備考
太平通宝	1	北宋	976		
景德元宝	2	#	1004~7		
天聖元宝	1	#	1023	篆字	
皇宋通宝	1	#	1038		
至和元宝	3	#	1055	(底板により判斷困難) 一枚不鮮明	
嘉祐通宝	2	#	1056~63		
元祐通宝	1	#	1086	篆	
聖宋元宝	2	#	1101	不鮮明(4)	
大觀通宝	1	#	1107		
開通元宝	1	#		私隸錢	
至大通宝	2	元	1309		
洪武通宝	1	明	1368~98		
永樂通宝	1	#	1403~24		
不明	3			篆(1) 一枚治平 元寶が不明	

計22

(併し不明3含む)

昭和62年度西川遺跡出土古銭鑄造年代順一覧表

第2表

銭名	枚数	時代	鉄造年代	書体	備考
至道元宝	2	北宋	A.D. 995~7		
咸平元宝	2	#	998		
景德元宝	1	#	1004~7		
祥符通宝	3	#	1008		
祥符元宝	2	#	1014		
天禧通宝	1	#	1017~21		
天聖元宝	4	#	1023	2枚 篆字	
明道元宝	1	#	1032		
皇宋通宝	9	#	1038	7枚 (内1枚?) 篆字	1枚不鮮明含む
嘉祐元宝	1	#	1056~63		
治平元宝	5	#	1064~7	5枚 篆字	
熙寧元宝	8	#	1068	3枚 (内1枚?) 篆字	1枚不鮮明含む
元豐通宝	10	#	1078	篆字	#
元祐通宝	6	#	1086	篆字	1枚不鮮明含む
紹聖元宝	3	#	1094	2枚 篆字	#
聖宋元宝	5	#	1101	2枚 篆字	2枚不鮮明含む
政和通宝	2	#	1111	2枚 篆字	
開通元宝	5				

(70)

(31)

(1127南宋鑄る)

第3表 昭和62年度西川遺跡出土古銭鑄造年代順一覧表

銭名	枚数	時代	鉄造年代	備考
大定通宝	2	金	A.D. 1170	
聖宋元宝	2	南宋	1253~8	北条康重と日蓮 宝祐元年~六年
洪武通宝	4	明	1368~98	洪武1~31
永樂通宝	9	明	1403~24	永樂1~22
宣德通宝	1	明	1426~35	宣德1~10
朝鮮通宝	2	李朝	太宗15 1415	太宗1~18 1401~1418

(20)

断触して判読出来ぬもの(19)

(15)

判読したものの

総数 124

(併し、割れて出土した1枚も1枚とする)

第4表 特殊な圓石

学位cm A.C.1

61年度	外径	穴径	深さ	形状	厚さ	備考
グリット						
10-W15	14.5	9.5	4	円錐	1.58 590	完全穴底 2.5
6号作 S-2	16	9	5.3	"	1.55 580	子を欠損下 底面 6.5深さ 2.0丸底
トレンチ	15.5	7	3.15	"	1.7 475	裏面 6.0深さ1.15皿状
"	10	5	1.1	丸底	0.8 220	

第5表

学位cm A.C.2

62年度	外径	穴径	深さ	形状	厚さ	備考
グリット						
0-W30	10.5	5	1.2	小型 丸底	0.85 230枚	
5-W15	14	6	1	皿底	1.3 325枚	皿底浅い
"	10.5	7.5	4	円錐	0.9 250枚	子欠損
5-W30	10	4	0.5	皿底	2.3 630枚	全体が安定性悪い
"	17	6.5	1.6	丸底	0.25 70枚	底まん丸く安定性悪い
25-W5	7.5	3.5	0.6	"	0.3 50枚	小形
"	18	8	2.25	丸底	3.1 850枚	底や平ら
25-W10	14	4	0.7	皿底	1.45 380枚	底丸く安定性悪い
25-W45	11.5	3.7	0.9	"	0.68 180枚	
"	14.5	5.5	1.6	丸底	1.75 450枚	
35-W35	7	4.3	1.7	円錐	0.28 80枚	底扁平
40-W50	(11.5)	7	2.8	丸底	1.4 400枚	ゆがみ各皿が 10 12 12.5
55-E15	18.5	7.5	2.7	円錐	3.6 970枚	約1貫 底扁平
75-W50	11.5	6.5	2.2	"	1.1 325枚	傾いた形状
75-W50	10	6.5	2.	円錐	0.48 120枚	裏面 5.5深さ 1皿底
80-W45	15	5.5	1.7	"	1.1 300枚	裏面 5深さ 1.5円錐
80-W50	5.5	4	0.7	皿底	0.18 50枚	小形
80-W60	8	2.5	0.5	"	0.2 50枚	"
"	15	5.3	1.3	丸底	1.2 310枚	底扁平
"	13.5	6	1	皿底	1.9 400枚	安定性悪い形状
85-W50	15.5	6.5	2.6	丸底	1.2 310枚	裏面 3.5深さ 0.55皿底
91	13.5	5	0.9	"	610枚	

第6表

火打金 単位ミリ

田王	ナシバー	長さ	幅	厚さ	形	備考
25-W50	F-1	75	30	1.5	中央頂上部 3 山孔 4枚	
" 25-W15	F-1	(10以上)	35	鋸厚く不測	山火打金?	
40-W45	F-5	45	24	3		
" 80-W45	F-4	70	30	鋸厚く不測	山火折損	
80-W60	F-1	(90)	18	4		半分折損、突出 部から突出す
85-W50	F-1	現在75 (推定80)	30			片方の肩部火打 火打金無し

土 师 器 坏 、 皿 觀 察 表

第7表

号賞 A	山上地点 ナンバー B	P	器形 C	口径 D	器高 E	底径 F	高延 G	胎土 H	施成 I	色調 J	手法の特徴		裏面 K	四辺底 L	底脚の形状 M	充 電 N	内 考 O
											外 P	内 Q					
1	1号住	1	○	12.5	4.4	4	3.2	褐色	良好	赤茶色	ヘラ削り	ハケメ横ナグ			ヘラ削り	口縁の 一層深く	口縁玉縁、半壁型
2	2号住	1	○	(11)	—	5	—	アライ	長	×	ハケメ横ナグ	×			条幅り	×	底邊をなったような内凹品 外周一層深く。地元産?
		2	○	(14)	4	—	—	×	×	乳白色 一部黒色	×	×			×		大小小・奥深窓の平盤出土の 年に属する。
		4	○	(11)	3.9	5	(4.5)	砂粒子 まぐり	×	赤じりの 赤褐色	×	×			×	上端有	地元産か? 甲斐型に似るが先史期ナシ
		5	○	(13)	3.5	3.5	(4.2)	アライ	×	褐色	×	ヘラ削き			×	口縁と 底脚を 残る	口縁や、外反
3		126	○	13	4.4	5.2	4	砂粒子 含み灰い	×	一輪色 裏色	×	ハケメ横ナグ			×	手稿存	有澤く、内部シミのよう に青黒色。大小小・奥深窓平盤 出土品に似る
4		127	○	12.5	2.8	5	—	アライ	×	赤褐色	×	×			×	先	内、外曲ス付有
5		128	○	11.5	4.5	6	5.2	×	×	褐色	×	ヘラ削き			×	口縁の 内側と 底脚を 残す	頭部内黒
		6	○	11.8	3.4	5.6	4.7	—	×	半分の褐色 下部淡色	×	×			×	手稿存	薄墨をなしたような模様内 外、地元産か?
		7	△	12.3	2.7	5	—	アライ	×	赤褐色	×	×			×	手稿存	頭部・脚部色
		77	○	(12.5)	3.9	5	(4)	×	×	×	×	ハケメ横ナグ			×	手稿存	頭部外一部黒色
3号住	①	○	(14)	4.6	6.5	(4.6)	—	×	×	山腹版 褐色	ハケメヨコ后 ヘラ削り	×		条幅り ヘラ削り	手稿存	下部と弧の内外墨濃い	
	②	○	(13)	4.1	4.6	(3.5)	—	褐色	長	赤茶色	ヘラ削り	×	(通)	古	条幅り		白羅子を欠損 甲斐型、口縁外反
	3	○	—	3.2	4.5	—	—	×	×	褐色	×	×			丸底ヘラ削き	手稿	口縁外反
6		4	○	13.1	2.8	4.5	—	×	×	赤茶色	×	×	(通)	若	ヘラ削り	若	口縁玉縁、 半壁型、口縁一部深く
		5	○	14.4	4.8	4.6	3.2	×	×	×	×	×	○		口縁の 一層深		側面欠損のため墨を読めず
7		6	○	12.7	4.1	5.5	4.3	×	×	褐色	ハケメヨコ后 ヘラ削り	×		条幅り ヘラ削り	若	内側墨濃 口縁の一部深く、外反	
8	4号住	1	○	12.5	3.9	7	3.7	緑カイ	良	褐色	ハケメヨコ	×	○	丸底	手稿存	口縁玉縁、内外ス付有	
	5号住	1	○	—	—	5.5	—	褐色	良好	赤茶色	斜めヘラ削り	×		条幅り		甲斐型	
9	6号住	1	○	14	3.8	5.3	3.5	砂粒子 含み灰い	良	白色ぬけた 青褐色	ハケメヨコ	×		×	手稿存	大小小・保造聯型、地元産?	
	8号住	26	○	12	4	5.8	4.8	アライ	悪い	赤褐色	ハケメヨコ后 ヘラ削り	×		ハケメ横ナグ 底ヘラ削り			
10		29	○	12.1	3.5	6	4.9	緑カイ	良	薄青褐色	ハケヨコナグ	×	○	丸底	若	底のヒビ割れ多く一部墨い	
11		30	○	11.8	4.2	5.5	4.7	褐色	良好	褐色	底ヘラ削り	○					口縁の一部欠ける 放射状紋文 不規則な黒斑、甲斐型
		15号住	1	○	—	—	5.8	—	アライ	悪い	薄茶色	ハケメ横ナグ	ハケメヨコ		ハケメナグ后 ヘラ削り	削丁型 のみ複	
		2	○	(14)	4.4	—	—	緑カイ	良	高麗色	×	ヘラ削き			×		
		4	○	(12)	4.0	—	—	褐色	良好	やへりの 赤褐色	×	×			ヘラ削き	手稿存	(底欠損) 甲斐型、火硝繪
		5	○	—	—	3.6	—	緑カイ	良	赤褐色	×	ハケメヨコ	○	丸底ヘラ削り			
		7-2	○	12.2	3.3	7.0	5.7	アライ	悪い	灰色かかった 青褐色	×	ハケメヨコ 後ミガキ	○	× ヒビ割れ	手稿	厚子、口縁と底が薄墨をぬ ったように高い	

年表 A	出土地点 B	P	器 形 ナンバー C	器 形 形状 D	口径 E	底径 F	底深 G	胎土 H	焼成 I	色調 J	手 振 の 特 徴		蓄 留 K	指 迹 痕 L	底部の形状 M	充 分 な 残存率 N	備 考 O					
											外 外											
											内 内	内 内										
			12	直	(19)			繊密	良好	赤茶色	*	ハケメヨコ						甲斐型、放射状焼文				
			13	O	—	4.1	—	—	アライ	悪い	茶褐色	削り痕	焼成中割れ		丸底	足跡一帯強	細く、たった工具で削成後に施文されていいる					
12			15	O	13	4.2	7.0	5.4	繊密	良	褐黄褐色	*	ハケメヨコ	外周多	ヘラ削り 丸底丸底	手底存		頭下部から立ち込めて傾斜状の削り痕				
			16	O	(13)	3.5	—	—	繊カイ	良	呪術褐色	ハケメヨコ ヘラ削り	ハケメヨコ	○	*	白模と 削り痕						
20号住	1	O	—	4.1	—	—	*	*	赤茶色	ハケメヨコ	ハケメヨコ		ヘラ削り		1底存	甲斐型 はね模様、放射状焼文						
		2	O	11	3.8	4.5	4.5	砂粒子含 みアライ	良	黃白色	*	*	口縁下に少し	丸底	十字強			底から立ち上りに傾いてい				
		3	O	(14)	6.8	7	(5.0)	繊密	良好	茶色	ハケメヨコ ヘラ削り	ミガキ		削り出凸台	山形型 火打石		甲斐型、放射状焼文					
13		4	O	10.7	3.7	5	4.7	*	*	赤茶色	*	*		ヘラ削り	ほば 充型		甲斐型、花咲状焼文					
		5	O	(11.4)	3.8	5	(4.1)	*	*	*	*	*		*	手底存	*						
		6	直	—	—	6.3		繊カイ	良	赤い茶褐色	ハケメヨコ	ミガキ		直切り口 ヘラ削り		直部と脚下平段						
21号住	2	O	(12)	3.7	5	4.2	砂粒子含 みアライ	良	黄褐色	ハケメヨコ	ハケメヨコ	○	ハケメ 丸底		1底存	沿紋のような黒いしみ						
14	3-1	O	11	3.7	6	5.5	*		外褐色 内は然かっ た茶褐色	*	斜めハケメ	○	*	口縁の 内側に へら削り	口縁の 内側に へら削り		口縁の 内側に へら削り					
15	3-2	O	(13)	3.9	5.5	(4.2)	繊カイ	*	ミガキかっ た茶褐色				直切り	手底存	焼元底の漆器器か?							
16	22号住	1	O	11.1	4.8	5.2	4.1	繊密	良好	赤茶色	斜めヘラ削り	ミガキ	○	直切り口 ヘラ削り	ほば 充型	半充型 放射状焼文、裏蓋不規切						
		33	O	—	3.6	—	—	繊カイ	良	黄褐色	ヘラヨコ	*	○	丸底	口縁と 脚下		口縁から 立上りに傾いてい					
17		47	O	13.5	4.7	6.6	4.4-7	*	良	赤茶色2012 底部へラ削り	ハケメヨコ ミガキ	少しお	丸底へラ削り			ほば 充型	口縫からV底に一部欠損					

土師器小型皿形土器(燈明皿)観察表

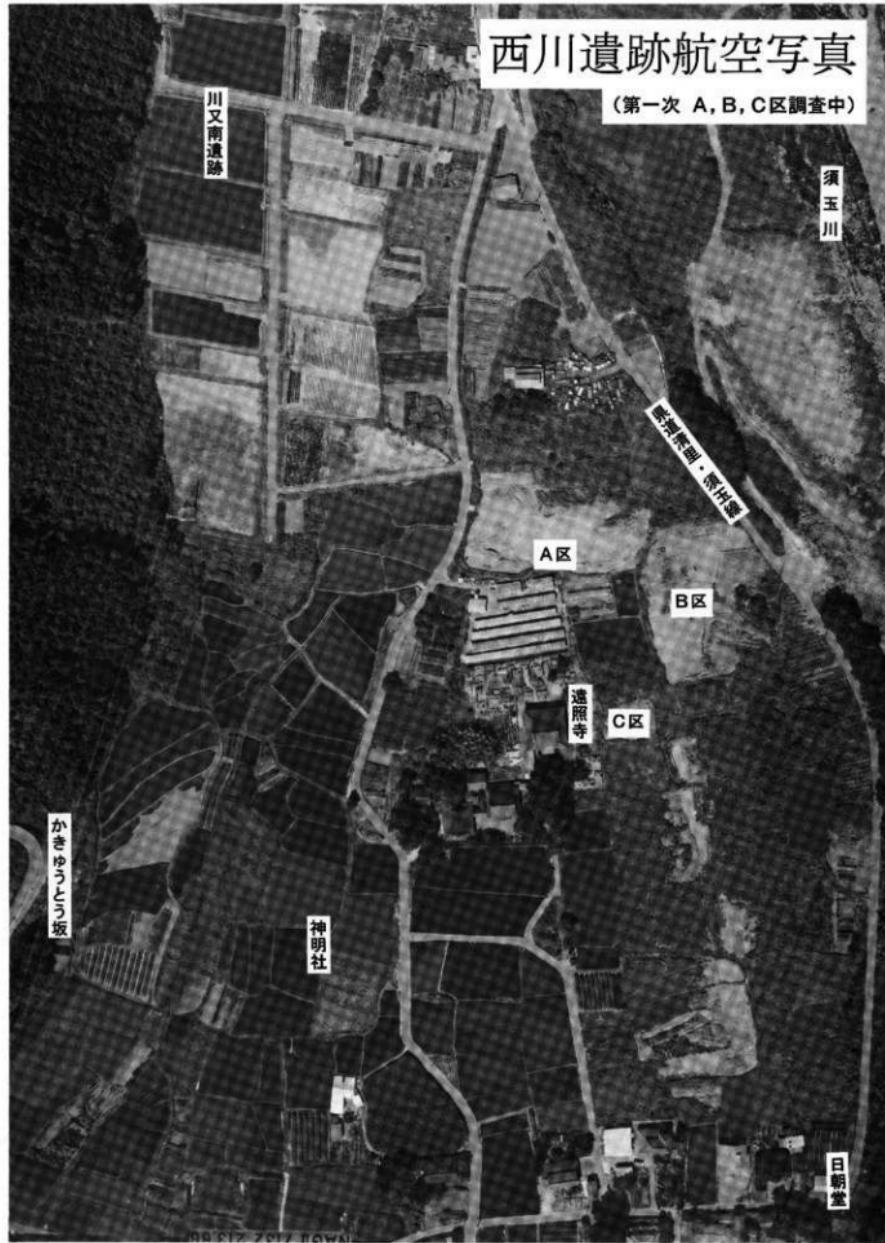
第9表

年表 A	出土地点 B	P	器 形 ナンバー C	器 形 形状 D	口径 E	底径 F	底深 G	胎土 H	焼成 I	色調 J	手 振 の 特 徴		蓄 留 K	指 迹 痕 L	底部の形状 M	充 分 な 残存率 N	備 考 O					
											外 外											
											内 内	内 内										
① 5-W10-1	O	8.7	2.1	4.8	アライ	斜め 剥離	薄茶色	ハケメヨコ	普通に 気泡小孔				直切り	複雑 示型	口縁V底状に欠損							
② 10-W35-3	O	10.5	2.5	5.5	繊カイ	良	乳白かかっ た茶褐色	*	ハケメヨコ				*	充	カワラケ? 成型型も悪い汚れ器							
③ 30-E15-1	O	(8.2)	2.9	4.5	アライ	黄褐色かかっ た薄茶色	*	*	ミガキ				*	手	外周凸凹にげしく 複雑な作り							
④ 65-W35-1	O	8.3	1.7	5.3	*	*	煙色	ハケメヨコ	口縁へラ削り 底部内側にい				*	充型	底部と外周が粗筋に作られて いる							
⑤ 65-W50-1	O	8.3	1.8	5.3	*	*	赤茶色	ハケメヨコ	*				直切りに底部 剥離	*	口縁が波をうなぎ、重ね 波							
⑥ 75-W30-1	O	11.3	2.8	5.8	繊カイ	良	薄に赤味 おびた褐色	*	ハケメヨコ				直切り	充	口縁に波をうなぎ、重ね 波付付着							
⑦ 110-W20	O	8.5	2.1	4.5	*	*	茶褐色	*	*				*	充	口縁にスヌ付着、重ね 波センターザー							

図版

西川遺跡航空写真

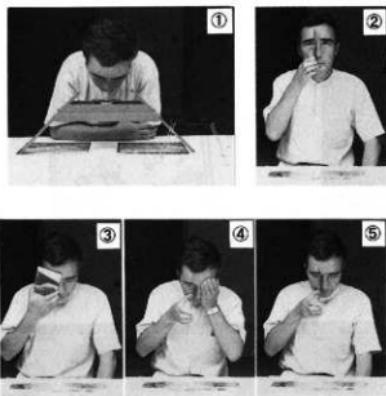
(第一次 A, B, C区調査中)





第二次発掘調査全景

反転立体方式による写真の見方

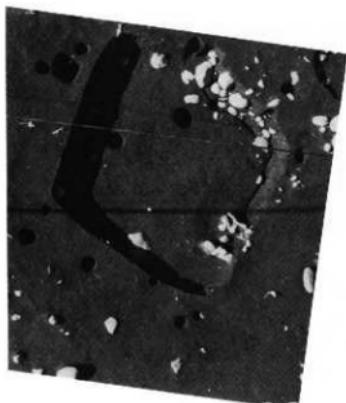


1号住居址カマド

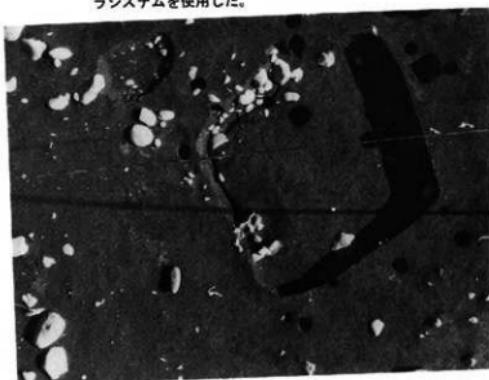
はじめに、須玉町では、昭和61年度の西川遺跡第一次発掘調査より、遺構の平面図等を写真測量によっておこなっています。

その原理は、気球又はケーブルによってカメラをあげ、その直下にある遺構などの目標物を約70%ずつ重複させて撮影し、その重複した部分の面図を図化機によって作図するというものです。撮られたそれらの写真は、状況を記録する平面的な写真だけでなく、立体的な三次元の記録として原図の役目を果してています。このようにして撮影された写真を立体的に見るには、普通、立体鏡(写真①)のような器具を使わなければ見れませんでしたが、地域の皆様に実感溢れる遺跡の状況を見て頂きたく、身近な鏡一枚を使用することによって、立体的に見られる反射立体方式をはじめて試みました。

1. 先づ鏡を用意して下さい。(できれば縁のないもの、鏡にひずみのないもの)
 2. 見ようとする写真の下に正、反の文字が記されています。鏡を右の目元に当て(写真②)、写真を見るあなたの間隔は30cm位離します。
 3. 右目をふさいで(閉じて)左の目で正の位置をおぼえておく。(写③)、次に左目を閉じる。右目で鏡にうつる反の写真を見る。はっきりした映像になるまで視力をあわせる。(写④)
 4. 鏡をあてたその状態で左目で正反の写真があわさって立体的に見えます。もし像が二重に見える時は、鏡や頭を少しずつずらして調整して見て下さい。(写⑤)
- ※ 鏡をとおして見る像是ガラスの関係でどうしても二重に見えるのが欠点です。
- ※ この方式は県文化課、米田明訓氏宅で見たライフ社の本にあった記事を参考にした。
- ※ 遺構の立体写真はシン航空㈱のリフティング・ケーブルカメラシステムを使用した。



正



反

1号住居址

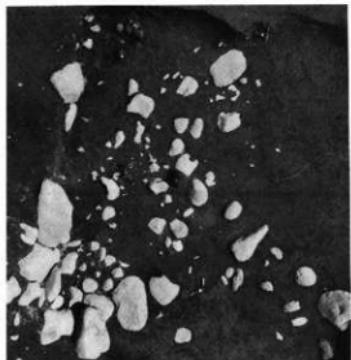
图版 4



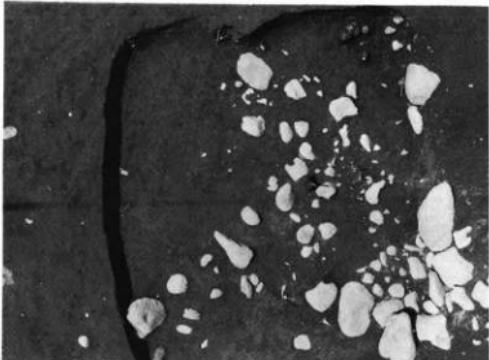
2号住居址土器出土状况



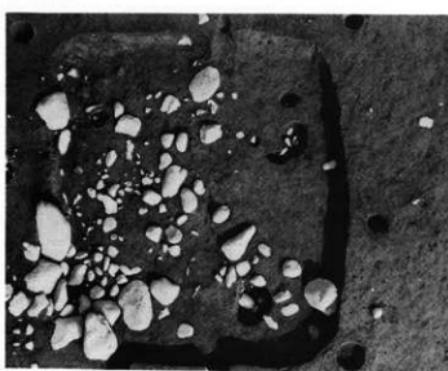
2号住居址平面图



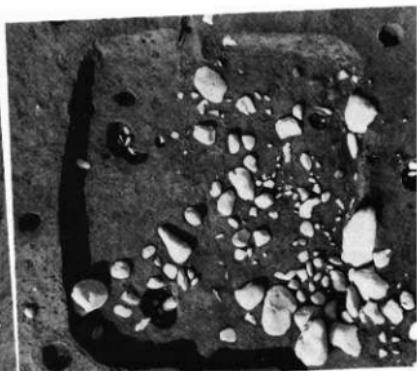
正



反

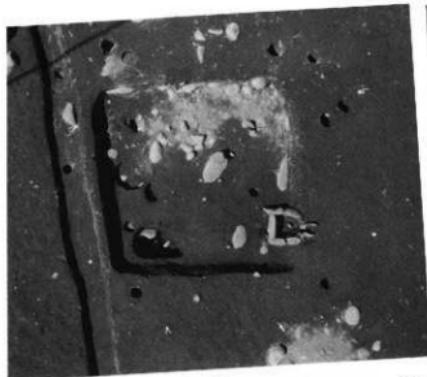


正

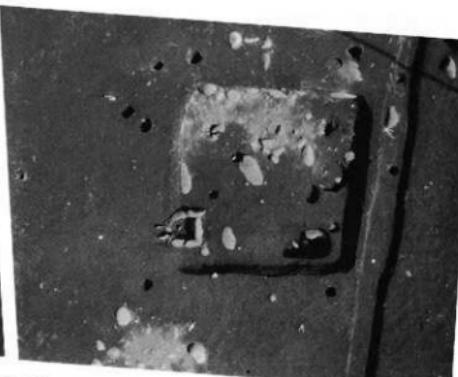


反

2号住居址(完掘)



正



反

3号住居址



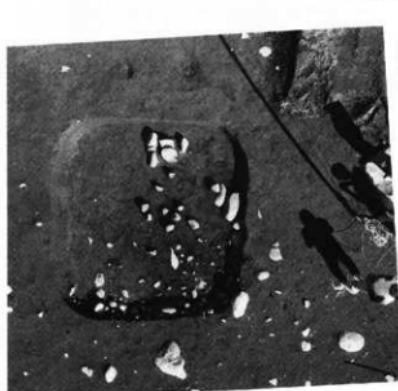
3号住居址(南より)



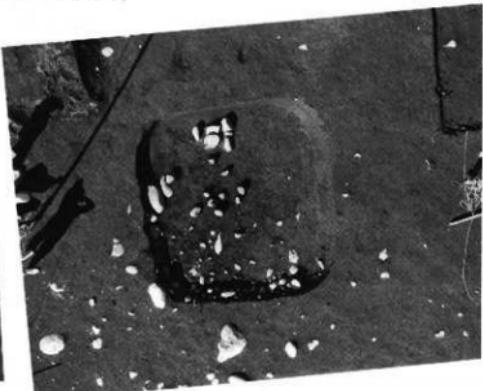
3号住居址カマド(西より)



3号住居址カマド(上より)



正



反

4号住居址

図版 6



南より



北より



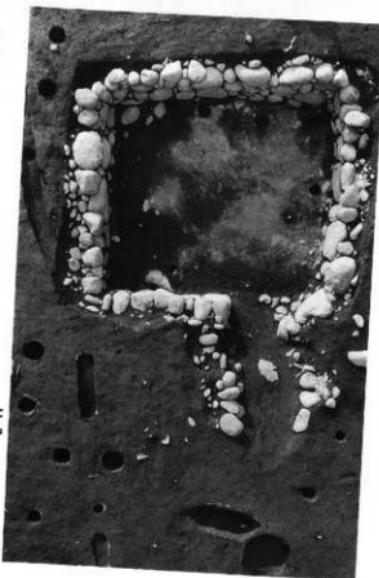
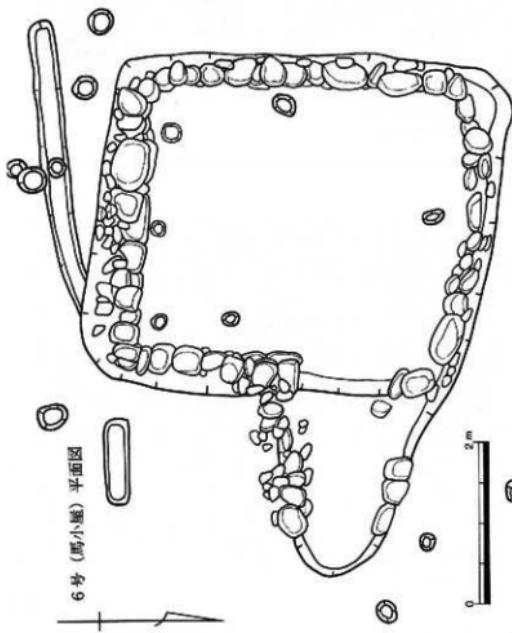
西より



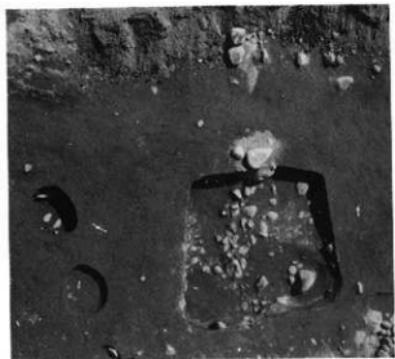
東部



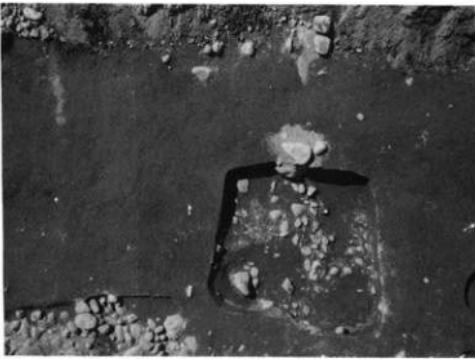
反



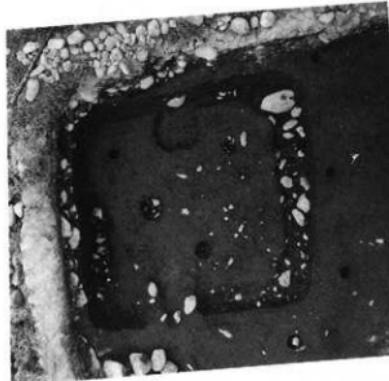
正



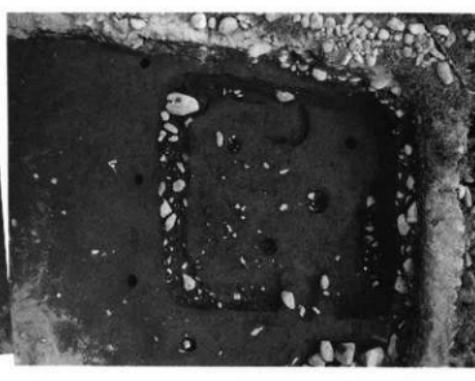
正



反



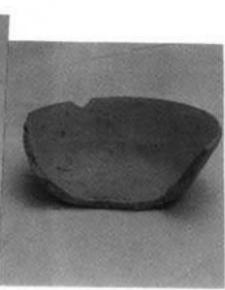
正



反



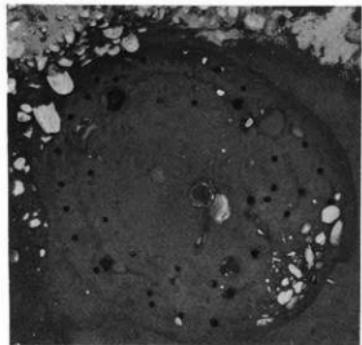
正



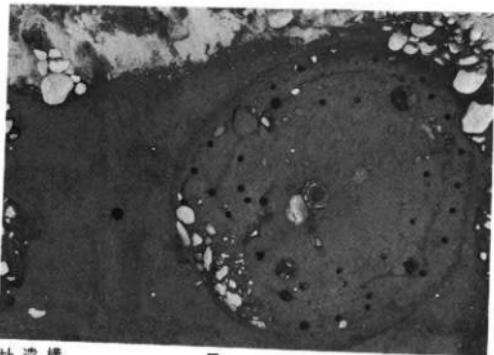
15号住居跡出土遺物 壺



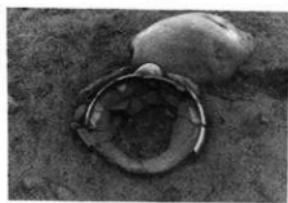
反



正



反



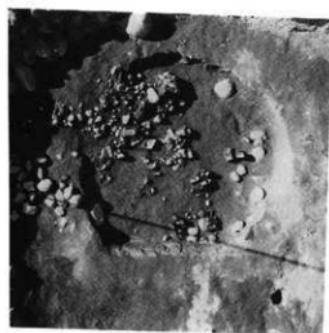
灰



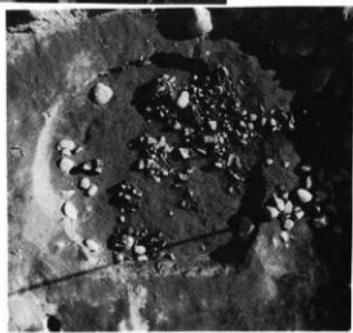
正



反



正



反

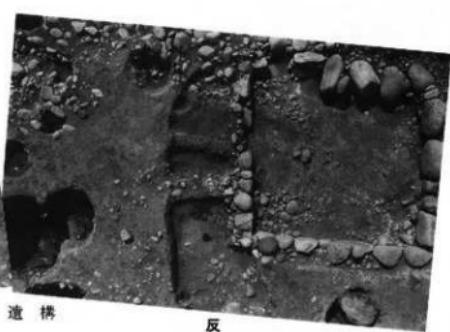
23号住居址土器出土状態



第二次 B 区



正



石組遺構

反



石組遺構発掘風景



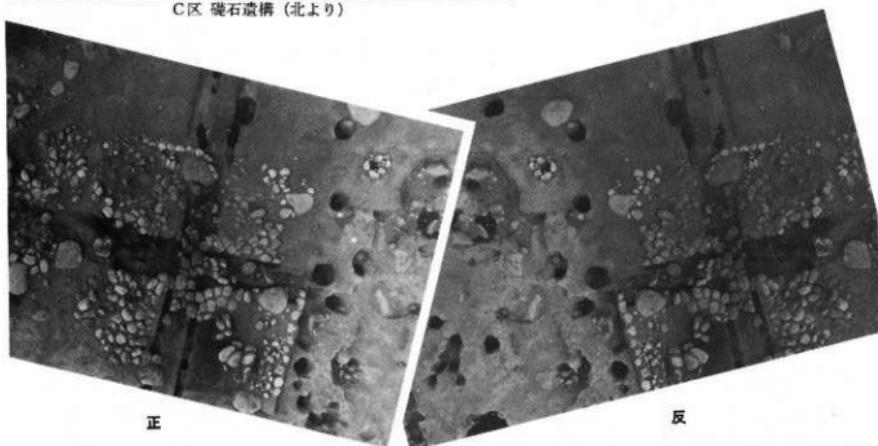
石組遺構内堆積状況



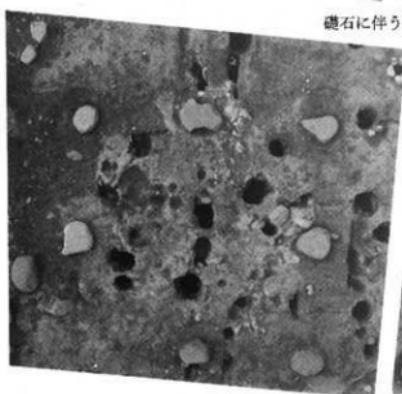
C区 磯石造構 (北より)



第二次C区 (気球より撮影)

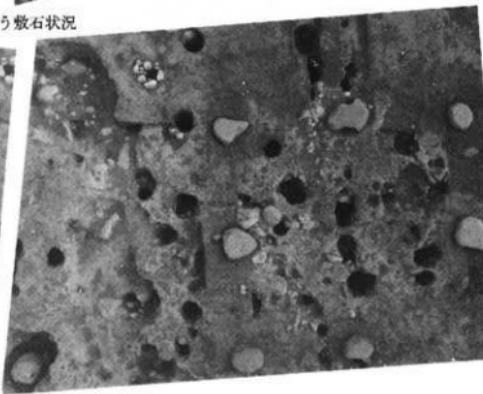


磯石に伴う敷石状況

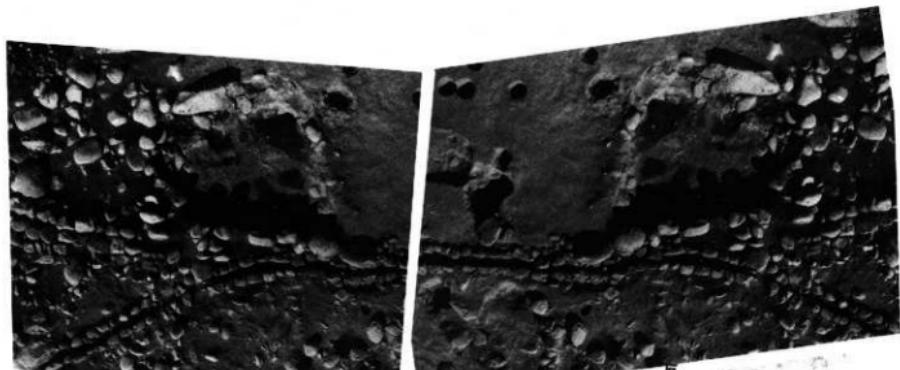


正

敷石除去後



反



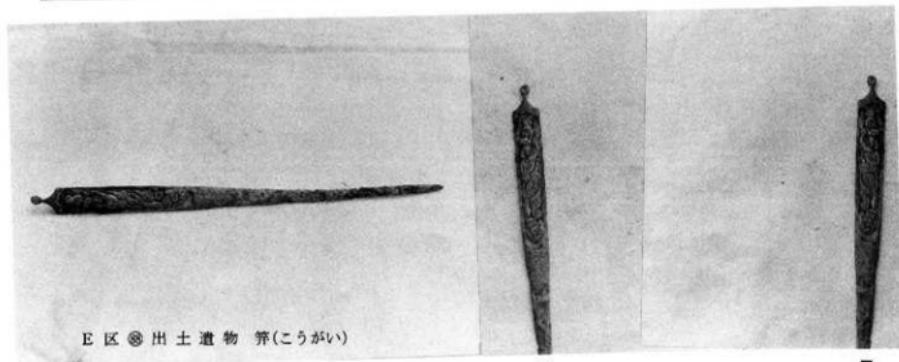
石列遺構



E 区 @ 出土 遺物 筍(こうがい)

正

反



綾玉町埋蔵文化財調査報告第5集

西川遺跡

昭和 63 年 3 月 25 日 印刷

昭和 63 年 3 月 31 日 発行

発行 綾玉町教育委員会

印刷 北北印刷(株)

